

25号

山口大学人文学部
異文化交流研究施設ニューズレター

2025

カナレットと歌川豊春

藤川 哲

(ふじかわ さとし)

人文学部評議員

中国で製作された3Dアニメ映画が、アニメ映画における世界歴代興行収入1位を記録したことが話題を呼んだ。日本の輸出文化の一角を担うアニメにおける、隣国の躍進を脅威と感じる向きもあったようで、むしろ日本が得意とするのは2Dアニメで市場が異なるから脅威ではない、という主張も見られた。日本のアニメ製作者やそのファン層は、世界のアニメ市場などどこ吹く風として、2Dによる表現を大切にしている、ということも出来そうだ。

アニメ映画ではないが、2009年に公開された「アバター」は、CG技術と3D映像を融合させた画期的作品で、架空の生物たちが繰り広げる活劇を、観客は3Dメガネを介した立体視で楽しんだ。こうした立体映像に対する飽くなき追求は、私見では、ルネサンス時代の遠近法の発明以来、西欧文明の基底を流れる芸術意欲の発露である。中国文明もまた、北宋末の《清明上河図》(北京、故宮博物院蔵)に見られるがごとく、精密緻密な描写への意欲が強い。これに対し、日本人は引目鉤鼻の平安美人にまで遡る簡略化された人物表現を、今も愛し続けているように思われる。

今年の4月から6月にかけて山口県立美術館で開催された「カナレットとヴェネツィアの輝き」展で人々に知られることとなったヴェネツィアの風景画家カナレット(1697-1768)には、歌川派の祖、歌川豊春(1735-1814)の浮絵の元絵となった素描がある。同素描からは、油絵が描かれ、銅版画も制作され、おそらくそうした版画あるいは版画作品の模作が日本に伝わって、豊春が写し取ったと考えられている。両者を比べれば、建物、人物、船、空模様から水面の表現まで、世界の捉え方、感性の違いが様々に見出せる。カナレットの素描の右側に描かれた建物の正面を横切る影は、特定の瞬間の情景であることを意識させる。豊春の「万里鐘響図」は、そのタイトルによって、絵では表せない「鐘の音」を観者に想像させようとしている。簡略化された描写には、想像の余地が多い。他文化を鏡として自文化を見つめ直し、双方の豊かさを味わうことは、異文化交流研究の醍醐味の一つと言える。さあ、山口で歴史を振り返り、現在と未来、そして世界文化を見晴るかそう。



カナレット
《ヴェネツィア：サンタ・クローチェに面する大運河》1734年頃
英国王室コレクション
Royal Collection Trust / © His Majesty King Charles III 2022



歌川豊春
《浮絵 紅毛フランカイノ湊万里鐘響図》制作年不詳
東京国立博物館